

2-1-1

大桑城（古城山）（407m・別名 金鷄山）

<大桑城跡と城下町遺跡群>

地元では城山と呼ばれている。山頂一帯には戦国時代の山城の跡が残り、麓の大桑地区には城下町を守る堀と土塁「四国堀跡」や、館・寺・屋敷地の伝承が点在している。発掘調査では弥生後期から現代まで存続する伝統的集落と、戦国期の城下都市、その両方の存在が確認される。

<国盗り合戦と金鷄伝説>

室町時代末期、織田信長の美濃攻略の少し前のこと、美濃の守護大名土岐氏、守護大斎藤氏、援軍の越前朝倉氏らが本拠地としていたここ大桑城を、斎藤道三が攻め落とし、これにより美濃一国を掌握した。

落城の際に土岐氏が城内の井戸に沈めた家宝の金の鷄が、いまでも元旦の朝に鳴くという伝説があり、この声を聴くと縁起が良いそうだ。

<眺望と白山信仰>

北に能郷白山や高賀山、西に伊吹山、東に中濃盆地、南に金華山や濃尾平野を一望する山頂付近には金剛童子の名が残り、平安末期以降中世にかけて長良川流域の濃尾一円に広く流布した白山修験の山寺が存在していた可能性がある。

<里山の自然と文化>

チャート・砂岩を主体とする急峻な尾根を中心にアカマツの二次林、山腹を中心にアベマキ・コナラの二次林、谷を中心にアラカシ・ヤマツバキの照葉樹林がみられる。こうした里山の二次林は、人為が関わることによって成立・維持される。江戸時代入山禁止だった金華山のシイ林とは対照的だ。しかし近年は他の里山と同様、植生遷移が進み、マツタケも出なくなった。化石燃料と肥料の普及により里山の資源が放棄されたからだ。里山の自然と文化は、麓の里人らが薪を採るなどして、持続可能な暮らしを受け継いできたことの証でもある。

いま一度、峯に立ち、歴史と文化を振り返り、地域社会と日本の将来像を夢描く…古城山がそんなふるさとの里山になるように。

山県市教育委員会

説明板より